

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 三好（竹内）恵子

本論文は、ソビエト連邦出身の亡命詩人、ヨシフ・ブロッキイ（1940-1996）の作品に現れる古典古代のモチーフに焦点をあて、それが彼の詩において単に古いものを愛好する古典趣味にはとどまらず、すぐれて現代的な意義を持つことを解明したものである。

ブロッキイは既に文学史に確固たる地位を占める20世紀ロシア有数の詩人であり、彼についてロシアや欧米で書かれた研究文献は膨大な数にのぼる。しかしその詩は高度な技法と複雑なイメージを駆使した難解なもので、日本では本格的な研究はまだ緒についたばかりである。本論文はそのような重要な詩人について、ロシアおよび欧米の先行研究を博搜したうえで、第2次世界大戦後の「廢墟」から出発した詩人の現代性について独自の解釈を打ち出した。

本論は全4章からなる。第1章では、「ディードとアエネーアス」というブロッキイの作品に即して、アフマートヴァとの継承関係を確認したうえで、ブロッキイが古典の素材をどのように現代的なものに換骨奪胎したかが解明されている。

第2章ではブロッキイの詩に現れる独特な<帝国>の概念を取り上げ、その背景に父性原理に基づくユダヤ＝キリスト教的な世界観があることを論証し、さらにブロッキイ自身の子を持つ父親になったという伝記的な要素も加味し、精神分析的な観点を取り込みながら作品を読み解いている。

第3章は全12編からなる連作「ローマ・エレジー」について、その全文を緻密に分析・解釈したうえで、これが古代ローマのエレジーというジャンルの現代的な「流用」であり、哀歌・追悼歌の側面だけでなく、官能的な恋愛抒情詩の側面もあわせもっていることを立証した。

第4章は「ローマ・エレジー」のブロッキイ自身による大胆な改変をともなう英訳をロシア語原文と対照し、原文と英訳の間に見られる違いを分析し、「自己翻訳」の創造的な側面と原作に対する破壊的な側面の両方を明らかにした。

どの章においても、竹内氏は詩のテーマと形式の両面を視野に入れ、個々の単語の微妙なニュアンスや音声まで注意深く検討したうえで、歴史的背景や伝記的事実と有機的に関連付けながらテキスト分析を緻密に行なっている。その結果、多くの難解な箇所が読み解かれ、詩に秘かに埋め込まれたモチーフが鮮やかに浮き彫りになった。解釈における創見の数々は、国際的にも評価されるべき高い水準のものである。

また本論文には、簡潔ながら要を得た研究史・日本における受容史の概観と詩人の略伝が収められている。

詩の分析に際しては語源的な考察や詩学・言語学的な概念の用い方に若干不正確な点が見られたが、日本における本格的なブロッキイ研究を切り拓く先駆的かつ独創的な業績としての本論文の価値を損なうものではない。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと判断した。